



Data

監督: 山田洋次
脚本: 山田洋次 朝原雄三
原作: 原田マハ『キネマの神様』(文春文庫)
出演: 沢田研二/菅田将暉/永野芽郁/野田洋次郎/北川景子/寺島しのぶ/小林稔侍/宮本信子/リリー・フランキー/前田旺志郎/志尊淳/松尾貴史/広岡由里子/北山雅康/原田泰造/片桐はいり/迫田孝也/近藤公園

👁️👁️ みどころ

日本映画の黄金期は1950年代! 映画人口は10億人! 1949年生まれの私はその姿をよく知っているが、スマホとSNS時代を生きる今の若者たちはそれが想像できる?

深作欣二監督の『蒲田行進曲』(82年)の舞台は東映の京都撮影所だったのに対し、「松竹映画100周年記念作品」たる本作の舞台は、松竹の大船撮影所をモデルにした蒲田撮影所。若き日の山田洋次監督を投影させた助監督のゴウは、そこで仲間たちとどんな活躍を?

他方、それから約50年後のゴウは? 山田洋次監督作品では、その対比が面白い。志村けんに代わるジュリーこと沢田研二は、今どんなダメ老人に? なぜこんな生きザマを? 彼の夢はどこに散ったの? そして、その再生は?

人間いつかは死ぬのだが、どこでどう死ぬかは俺の自由! 死ぬまでそんなワガママを押し通し、自分の夢に生きた主人公に拍手!

———— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ———

■□■日本映画の黄金期は1950年代! 映画人口は10億人■□■

1949年に愛媛県松山市の中心部に生まれた私は、小学校1、2年生の頃から両親に連れられて中村錦之助、東千代之介、美空ひばりの映画をよく観に行った。じっと座っていることに飽きた私に、母親はよくおにぎりやお菓子を与えてくれていたものだ。また、父親が時々出かける一流映画館での試写会にもよく同行したが、これは夕方の上映だったので、家に帰るのは9時頃になった。そのため、電気の消えかけた商店街を眠い目をこすりながら歩いて帰った記憶も強い。中学3年生頃からは、1人で3本立て55円の映画をよく観に行っていた。

日本映画の黄金時代は1950年代だが、山田洋次監督が松竹に入社したのは1954

年。当時は松竹、東宝、東映、大映、日活の「五社協定」がまかり通っていたが、あらゆる製作所では次々と映画が製作され、質・量ともに充実していた。当時の映画人口は10億人を超えていたから、日本人は大人も子供も平均して、年に10本の映画を観ていたことになる。もちろん、映画館は今のようにはきれいでなく、座席指定でもなく、総入れ替え制でもなかった。今の若者はそんな映画全盛時代の映画館を知らないだろうが、せめて想像してもらいたいものだ。

しかして、本作の主人公ゴウこと円山郷直（菅田将暉）が今、助監督として働いている松竹の大船撮影所をモデルにした蒲田撮影所では、映画関係者はそれぞれどんな営みを？

■□■『蒲田行進曲』から約40年！撮影所の活気・活性は？■□■

映画のことを「シネマ」と言うか「キネマ」と言うかは好みの問題だが、「キネマの世界」という歌詞が入った『蒲田行進曲』という曲が一世を風靡したのは1982年。今から約40年前だ。Wikipediaによれば、同曲は松竹映画『親父とその子』（29年）の主題歌として発表され、1929年（昭和4年）8月に日本コロムビアからレコードが発売されて流行歌となり、松竹キネマ（現・松竹株式会社）蒲田撮影所の所歌としても採用されたそう。後に、深作欣二監督の『蒲田行進曲』（82年）の主題歌として使われた同曲は、松坂慶子・風間杜夫・平田満の3人が歌って大ヒット。映画も、第56回キネマ旬報で日本映画ベスト・テン1位をはじめ、各賞を総ナメにした。その舞台になったのは、東映の京都撮影所。主役は新選組副長土方歳三を演じる「銀ちゃん」こと倉岡銀四郎（風間杜夫）で、ヤス役の平田満と大部屋女優の松坂慶子がそれに絡んでいた。そこでは、銀ちゃんが、まさに銀幕の大スターとして君臨していた。

それに対して、本作の舞台になるのは、山田洋次監督の分身ともいえるゴウが助監督として働いている松竹の蒲田撮影所だ。そこで君臨しているのは、出水宏監督（リリー・フランキー）やスター女優の桂園子（北川景子）たちだが、「俺だっていつかは」、そんな思いでゴウは日々の業務に励むと共に、密かに『キネマの神様』と題する新作映画の構想を温めていた。

映写技師のテラシンこと寺林新太郎（野田洋次郎）はそんなゴウの親友だが、自分の才能の限界を自覚する彼の夢は映画製作ではなく、小さな映画館のオーナーになること。その名は、「テアトル銀幕」にするそうだが、さて、その夢の実現は？また、撮影所近くの食堂の看板娘・淑子（永野芽郁）は、撮影所の人々に可愛がられながら毎日楽しく働いていた。出水監督は時々、「ぼちぼち嫁に・・・」といらざるお節介をしていたが、彼女が密かに想っている恋のお相手は？『蒲田行進曲』でも、東映の京都撮影所は誰かが命懸けで挑まなければならない“階段落ち”を含む素晴らしい映画の完成に向けて活気にあふれていたが、それは本作に見る蒲田撮影所も同じだ。

本作導入部では、平成の“失われた30年”を経て、どんどん沈み込んでいる今の日本映画とは全然違う、そんな蒲田撮影所の活気と活性に注目！

■□■志村けん死す！本作は頓挫？いやいや、ジュリーが！■□■

山田洋次監督が「松竹映画100周年記念作品」として『キネマの神様』に挑戦！その主演は志村けん。そう聞いただけで、なんとなくストーリーが想定でき、主人公の演技も想像していたが、2020年3月29日、新型コロナウイルスの感染により死亡！このニュースによって、新型コロナウイルスの恐ろしさが改めて日本国中に広まったが、本作の製作もそれによって頓挫？誰もがそう思ったが、いやいや、何の何の！日本映画界の人材は多い。亡き志村けんの代わりに、年老いたゴウ役を演じるのは一体誰？

それは、グループサウンズ全盛期には、「ザ・タイガース」のリードボーカルを務め、ソロになってからは『勝手にしやがれ』で、何ともカッコいいレコード大賞歌手になった“ジュリー”こと沢田研二だから、ビックリ。決して演技はうまいとは言えないが、年齢的には私と同級生の彼が、今は若き日の面影が全く見えない妻の淑子（宮本信子）に苦勞ばかりかけているダメ親父（じい役）を演じている。

助監督として活躍を続け、ついに自分の書いたシナリオ『キネマの神様』の映画化では、監督に抜擢されたゴウはその50年後の今、なぜこんな無類のギャンブル好きで、妻の淑子からも、娘の歩（寺島しのぶ）からも見放されているダメ親父になり果てているの？1度はすべての借金を清算したはずなのに、娘の職場まで借金取りが押し掛けてきたのは、一体なぜ？怒りが頂点に達した歩は、父親から通帳を取り上げ、「競馬はダメ」と宣言したが、そこで面白いのは「映画館通いはオーケー」と宣言したこと。だって、こんな父親でも、映画館通いをしてくれれば、お金はほとんどかからないのだから。

そんな状況になれば、フーテンの寅さんならすぐに家を飛び出て旅に出ていたが、さて、ゴウの行き先は？

■□■親友は夢を現実に！コロナ禍、名画座の経営は？■□■

初監督作品『キネマの神様』の撮影に挑んでいたゴウは、なぜそれに失敗したの？それは本作を観てのお楽しみだが、失意の中で映画界を去っていったゴウとは正反対に、今のテラシン（小林稔侍）は自分の夢を実現し、「テアトル銀幕」の館主としてさまざまな名画を上映していた。家を追い出されたゴウが行くところはそんなテラシンの映画館しかなかったが、そこで昔の名作を見ていると、スクリーン上にはかつての仲間たちが次々と・・・。

本作の完成については、コロナによる志村けんの死亡による主演の変更だけでなく、脚本の変更も余儀なくされた。コロナのパンデミック化が続く中、日本でも緊急事態宣言が相次ぎ、飲食店や大規模商業施設、そして映画館も休業を余儀なくされた。映画館の営業がなぜ制限されるのか私には全然納得できないが、それによって名画座系の単館映画館の経営が苦しくなったのは当然だ。そんな中、政府への支援要請やクラウド・ファンディングが登場したが、変更された本作の脚本ではそんなシークエンスも登場するので、それにも注目！

ちなみに、今ゴウの妻になっているのは50年後の淑子だが、若き日、蒲田撮影所で淑

子にラブレターを書いていたのはテラシンだ。本作前半の、蒲田撮影所における映画製作を巡る青春模様の中では、山田洋次脚本らしく、微妙な“三角関係”も描かれるが、結局その勝者と敗者は？また、その意思決定は誰が？そんな青春時代を経て、今なぜ淑子はゴウの妻になっているの？ちなみに、淑子は偶然テアトル銀幕でテラシンと再会し、アルバイトをしているという設定だが、これはちょっとおかしいのでは・・・？

■□■安易な設定、安易な再生だが、おとぎ話ならOK！■□■

ヨーロッパの映画、とりわけフランスの映画はクソ難しいものが多いし、邦画でもその路線を目指すものは多い。しかし、山田洋次監督作品は、その逆の分かりやすいものが多い。そんな山田洋次監督が挑んだ「松竹映画100周年記念作品」では、『キネマの神様』というタイトルを見ても、分かりやすさが命綱となる。全50作も続いた『男はつらいよ』シリーズでは、結局フーテンの寅さんの“ダメ男”ぶりが治ることはなかった。あれだけ自由気ままに生き、自由気ままに死んでいったのだから、彼はある意味で幸せだったはず。

しかし、本作のゴウを見ていると、78歳になった今、娘の歩が最大の難敵になっているし、従順だった妻の淑子も今や完全に歩の味方になってしまったから、家の中にゴウの居場所がなくなってしまったのは仕方がない。しかし、彼は寅さんと違って“渡世人”ではなく、単なる遊び好きの老人に過ぎないから、すぐに家に戻ってこざるを得なかったのも仕方がない。そこで面白いのは、いかにも平成生まれの今ドキの若者と言える歩の息子の勇太（前田旺志郎）の存在とキャラだ。

世代の違いを含め、勇太とゴウの間には何の価値観の共有もないから、祖父と孫という血縁関係はあっても、実生活では何の縁もゆかりもない。そんな2人の“ある作業”を通じて、真の信頼が誕生していくストーリーに注目！それは、たまたま、かつてゴウの初監督作品として製作していた『キネマの神様』の脚本を勇太が読み、その素晴らしさに感激したためだが、これはまさに“令和の奇跡”としか言いようがない。

しかして、その後の本作のストーリーは、何とも安易な設定で進行し、落ちぶれていたゴウが一躍“時の人”となって華麗なる再生を果たすから、それに注目！これはいくら何でも現実無視の設定であり、安易すぎる人間再生の物語だが、「松竹映画100周年記念作品」たる本作をおとぎ話と考えれば、それでオーケー！

■□■北川景子の瞳に注目！時空を超えて！アイデアに拍手！■□■

篠原哲雄監督の『真夏のオリオン』（09年）（『シネマ22』253頁）の評論で、私は「北川景子の敬礼姿に注目！」と書いた。それは、出撃していく恋人に、お守りとして自分の書いた「真夏のオリオン」という曲の楽譜を手渡した後のカッコいいシークエンスだが、彼女のキリリとした姿の美しさは今でも強く私の記憶に残っている。それと同じように、本作では、北川景子の大きく、つぶらな瞳に注目！

歳を取れば、誰でも昔の良き時代を楽しく思い出すのは当然。2024年4月に弁護士生活50周年を迎える私は、目下『頑張ったで50年！』の出版に向けて、楽しい思い

出を整理中だが、「松竹映画100周年記念作品」として本作に挑み、しかも、そのタイトルを『キネマの神様』とした山田洋次監督なら、その舞台が蒲田撮影所になったのは当然だ。しかし、本作を単なる回顧物語にしたのでは意味がない。本作の主人公はゴウだが、その青春時代と、78歳の老人になった今をどう対比させて描き、さらに、映画のラスト（大往生）をどう設定すればいいの？それを考え抜いた山田洋次監督は、何年か前に、「アメリカ映画で、エリザベス・テイラーの瞳にスタッフが映りこんでいる」という話を聞いたことを思い出し、「それを使った映画が作れないか」と考えていたところ、「スターの瞳をズームアップしていくと、いつの間にか何十年も前の世界に帰っていくというアイデア」を思い付いたらしい。しかして、本作の前半には、蒲田撮影所で銀幕の大スターのオーラをまき散らしている大女優・桂園子（北川景子）の瞳が大きくクローズアップされるシーンが登場するので、それに注目！これは、本作のクライマックスに向けてどんな伏線に？

78歳にして『キネマの神様』の脚本で脚本賞を受賞したゴウは、その後は祝賀パーティー続き。コロナ禍では本来それも控えるべきだが、78歳の頑固じじいのゴウには、そんな自制心はないようだ。妻の淑子は酒量が急に増えてきたゴウを心配していたが、今日はテアトル銀幕でかつての大女優・園子が主演する懐かしい名作が上映されるから、ゴウにとってそれは必見！車いすに乗り、久しぶりに妻の淑子、娘の歩と共にテアトル銀幕に乗り込んだゴウは、コロナ対策として1席ずつ空けられた座席に座ってスクリーンを凝視していたが、園子が登場してくると、ゴウは思わず彼女に声をかけてしまうことに。すると、アレアレ不思議。その声を聞いた園子は、スクリーンを超え、時空を超えてゴウの隣の席に座りこんできたからビックリ！さあ、そこで2人はどんな会話を？

もちろん、こんなバカげた設定はナンセンスだが、「松竹映画100周年記念作品」の『キネマの神様』と題する山田洋次監督作品ならこれもオーケー！

2021（令和3）年8月13日記